

# 父母が

## 頭かき撫で

## 幸くあれ

## いひし言葉ぜ

## 忘れかねつる

この歌は、駿河国(現在の静岡県中部)出身の防人であった丈部稲麻呂の歌です。

防人とは、九州北部の沿岸警備にあたった兵士のことです。この歌が詠まれた755年(天平勝宝7歳)ごろは、遠江国(現在の静岡県西部)より東の「東国」と呼ばれた地域から徴集されていまし

た。「幸くあれ」と「ざくあれ」と「言葉ぞ」が「けとばせ」というように、当時の東国方言もうかがえます。

防人歌ではしばしば妻子との別れの辛さが表現されますが、この歌のように保護者との別れを表現した例もありません。そうした歌の作者たちは年若かった可能性があり、頭を撫

やまと  
万葉がたり

であるという行為は呪術的であると同時に、どこか幼い子どもへの動作を彷彿させます。

万葉歌の中で「幸」は旅の無事を祈る歌に多くみられます。古代における旅とは困難で命の危険がともなうものであり、「幸」とは、無事に命が続くことであつたとみられます。「幸くあれ」と旅立つ

丈部稲麻呂 卷二十四三四六

人の無事を祈って送り出し、実際に旅する人たちは「ま幸くあらば」再び戻って来よう、と無事の帰還を願って歌を詠みました。それを言葉にして発すること、重要なことである、国を願う、とあり、言

【訳】父母が頭を撫でて、無事ですよと言った言葉が、忘れかねるよ。

です。

現代社会においても、突然の事故や戦争に見舞われます。昨今の状況を憂い、無力ながら、自分自身、家族や地域の人々、この世界に生きる生命体、すべて「幸くあれ」と願わずにはいられません。(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか)

訂正します

5月18日「やまと万葉がたり」の記事中の訳で、「気持をほらす」とあるのは、「気持ちはほらす」の誤りでした。

# とごしへに 夏冬行けや

## 袈かはらも 扇あふぎ放はなたぬ

## 山に住む人

柿本人麻呂歌集(巻九・一六八二)

『万葉集』に収められた歌には、季節の移ろいや人の心の動きなどを歌ったものが多くありますが、今回取り上げるのは「絵画の感想」という、少し風変わりな歌です。

詞には「忍壁皇子に献る歌一首 仙人の形を詠む」とあります。忍壁皇子は天武天皇の皇子たちの中では比較的年長で、史書や律令の編纂といった文筆実務面の業績で知られます。人麻呂は忍壁皇子宮に仕えていた時期があると言われているので、この歌も人麻呂自身の作歌とみる意見が

やまと  
万葉がたり

あります。歌中に見える「山に住む人」とは、題詞に言う「仙人」のことと考えられます。仙人は、中国で古くから理想的な人間のあり方と考えられてきた存在で、不老不死の秘術を修得し、俗世を離れて山中に住むとされました。歌の内容は、冬に用いるかわごころも(毛皮の服)

と夏に用いる扇を共に手放さないので、仙人が不老不死であるために夏と冬の繰り返しに永遠に続くからなのか、という問いかけです。歌が詠まれた場に居合わせた人々の笑いを誘う、滑稽な要素を含んだ歌と言えます。

この歌の作者は、おそらく忍壁皇子宮にあって屏風などに描かれた仙人の絵を目にした、かわごころもと扇を身につけた絵姿から得た率直な印象を当意即ちに歌い、宮の主人で

をどこかから入手したのかも知れません。仙人の絵は海外から伝わった最新の流行文物であり、描かれた仙人の姿は当時の人々にとって新奇な珍しいものでしたのでしょう。(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

【訳】永久に夏と冬が過ぎるから、皮の衣も扇も放さないので。山に住む人よ。

・持統天皇の時代には、仙人に代表される中国の神仙思想の影響が上流社会に及んでいて、ことが知られています。忍壁皇子もそうした潮流に乗って、仙人の絵

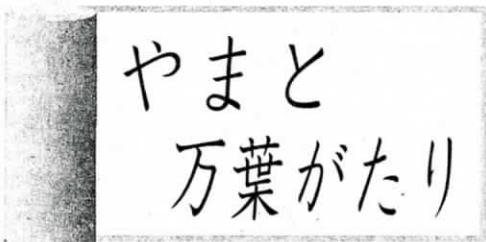


天飛ぶや 軽の社の 斎槻

幾世まであらむ 隠妻そも

作者未詳(巻十一・二六五六)

この歌に詠まれてい
る「軽」は、古代大和
の地名です。軽は、空
を飛ぶ雁と音を通じる
ことから「天飛ぶ」の
枕詞を持ち、『万葉集』
をはじめとする文献に
も頻繁に登場する古代
の地名としてよく知ら
れています。現在も橿
原市大軽町として地名
が残っており、近鉄橿
原神宮前駅の東側一帯
が古代の軽の故地に当
っています。



古代の軽の地では、
大和盆地を南北に縦
貫する幹線道路であ
る下ツ道と東西方向
の阿倍山田道が交わ
り、その交差点は「軽
街」と呼ばれました。
古来より交通の要衝
として賑わい、「軽市」
と呼ばれた市が繁栄し
たことでも知られま
す。軽の斎槻は、軽の
地を踏んだことのある
人々の誰も見慣

れたおなじみの大樹
であったとみられま
す。
古代の市には、市を
象徴する聖なる樹木
がしばしば生えてい
たと言われます。三輪
山の南西麓にあったと
される海柘榴市は、軽
と同じように交通の
要衝に位置し、大勢の
男女が集まって歌垣
が行われたことでも
知られています。海柘
榴市には、その名が
示すとおりツバキの
木が生えていたとき
存在感を誇示してい
た土地の象徴として、
軽の地は、各地から
飛鳥へ向かう人々の多
くが通過する、飛鳥の
入り口に当たる場所
で、軽の斎槻はそうし
た樹木は街や市を目
指して道路を行き交
う人々の目印として、
シンボルツリーの役割
を担っていたと考えら
れます。

【訳】軽の社の聖なる槻の木がいつの世までもあ
るように、あなたをいつまでも隠し妻のままにし
ておかなければならないのだろうか。

(県立万葉文化館主任
研究員・竹内亮)